

# 中学校における「主体的・対話的で深い学び」の 視点に立った授業の推進に関する課題と解決

— 子どもの見取りに着目した指導助言から —

学籍番号 209112

氏名 小泉 宏之

主指導教員 餅木 哲郎

## 1. 背景

### 1.1 問題の所在

新学習指導要領では予測不可能な今後の社会に向けて、生涯にわたって能動的に学び続けることができるように「生きて働く『知識・技能』の習得」「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」の3つの資質・能力を子どもたちに育むことが求められている。そして、それらの資質・能力を育むための授業づくりとして、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業の実践が示されている。

しかし学校現場では、知識の獲得を重視した教師主体の授業が多く取り組まれており、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業の実践が進んでいないのではないかという危機感を報告者は抱いている。教師が実践できるための具体的な手立てを示すことは急務である。

### 1.2 研究の目的と仮説

#### (1) 目的

教師が「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業を実践できるようになるために、支援者によるどのような指導助言が効果的であるのかを明らかにすることである。

#### (2) 仮説

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業の主語は「子ども」である。そのため「子どもたち一人ひとりが何を考えているのか」や「どのようなことができるようになったのか」等の子どもの実態を、教師が適切に掴む資質・能力が実践につながるのではないかと仮説を立てる。

## 2. 方法

(1) 中学校の教職員合計63名を対象に「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりに関するアンケートを実施し、授業実践に対する実態と課題意識を把握する。

(2) 令和2年度の推進員(※)に対して、研究授業後のインタビューやリフレクションを実施することを通じて、どのような出来事があった授業づくりや子どもに対する課題意識が変容したのかを把握する。

(3) 令和3年度の推進員に事前インタビューを実施することを通じて、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業の実践について抱いている疑問や悩み、またどのような子ども

の見取りを意識しているのかを把握する。

(4) 子どもの見取りに着目した指導助言を通じて、推進員の授業づくりや子どもに対する課題意識がどのように変容しているのかを検証する。

(5) 報告者の指導助言が2年間の実践でどのように変容したのかを振り返り、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業を実践する効果的な指導助言の要素を明らかにする。

(※) 大阪市教育委員会の学力向上に向けた事業の1つである「『主体的・対話的で深い学び』の推進事業」に参加している小学校・中学校の教職員であり、令和2年度は8名、令和3年度は6名が推進員として委嘱されている。本研究において報告者は、推進員への指導助言を通じて授業変容を働きかけており、その成果をまとめるものとする。

### 3. 結果

(1) 報告者の予想以上に中学校教員の「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業の実践に対する関心は高く、その一方で「具体的な授業づくりの手法や評価方法が分からない」や「授業時間を確保できない」といった課題があった。

(2) 令和2年度の推進員の授業変容の原動力として、「主体的に学習に取り組む子どもの姿」やそのような授業づくりを実践することができた達成感にあることを読み取ることができた。

(3) 事前インタビューを通じて、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」が持つ言葉のイメージから、学習活動が捉えられている実態を把握することができた。

(4) 子どもの見取りに着目した指導助言は授業の変容に効果的であるが、それと同時に教科の本質を踏まえた指導助言も必要な要素であった。

(5) 報告者の指導助言は、最初から解決方法を提示するのではなく、相手の課題意識や疑問点を掘り下げる問いかけを通じて、何よりも授業変容への「必要性」や「納得感」を感じてもらおう指導助言に変わっていた。

### 4. 総括とさらなる提案

(1) 教師が授業を変容した原動力には、子どもが主体的に学習に取り組む姿（「教師が予想をしていなかった子が目標を達成した姿」や「教師の想像以上に自分たちの意見を発表したり交流したりする姿」）に対する喜びや、そのような授業を実践できた達成感があった。

(2) 授業変容を促すためには、教師に「必要性」や「納得感」を感じてもらうことが重要である。効果的な指導助言とは、授業づくりの手立てを最初から伝えるのではなく、まず「どのような授業を作りたいのですか」や「どうしてそのような発問をしたのですか」など、教師の思いや行動を掘り下げていく問いかけである。そして「発問に対して子どもたちはどのように考えていましたか」や「振り返りに子どもたちは何を書いていると思いますか」といった子どもの見取りに着目した指導助言を通じて、教師は子どもたちの視点に立って授業づくりに臨んでいなかった自分に気づき、子どもを見取る力が磨かれていく。

(3) 提言として「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業を実践するためには、子どもの見取りが不可欠であるが、一朝一夕の取組でできるようにはならない。私たち教師は、教室にいる子どもたち一人ひとりが、どのような学びの実態であるのかを適切に見取る必要がある。そして一人でも多くの学習に困っている子どもに気づき、膝を曲げて同じ目線に立ってその子の気持ちに寄り添いながら、支援を働きかけることができる教師で在りたい。